

vivo

水戸芸術館音楽紙 [ヴィーヴォ]

11

November 2002

CONTENTS

特集: MCO 第51・52回定期演奏会 1	4
最近の公演から 5	6
ネットマ& Petite 情報 7	
インフォメーション 8	



水戸室内管弦楽団



わけ 「室内楽」には理由がある。

11 / 9(土) 10(日)水戸室内管弦楽団第51回演奏会

“室内楽の心”に満ちた演奏会

「これは、室内楽である」水戸室内管弦楽団(以下MCO)第51回定期演奏会のチラシに、私たちはこんなキャッチコピーを冠しました。だいたい9人くらいまでの編成で演奏されるアンサンブル音楽に用いられることの多い「室内楽」という言葉を、「室内管弦楽団」であるMCOに用いるのはいかがなものか...と思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、これは別に気分的なものではなく、根拠があります。つまり、この第51回定期演奏会で取り上げられる曲目は、どれも「室内楽的な精神」をもったものばかりだからです。

まずハイドンの協奏交響曲。“協奏交響曲(サンフォニー・コンセルタント)”は複数の独奏楽器が華やかに活躍する18世紀末の人気曲種であり、ハイドンの曲は、オーボエ、ファゴット、ヴァイオリン、チェロと4つの独奏パートを擁します。ソリストたちが交互に漫然とソロをとるような作品も多い中で、ハイドンのそれは各パート間の“おしゃべりの量”の豊富さで群を抜いています。4つの楽器は始終ソロを競いあうばかりか、誰かがソロを弾いているときでも他の3人は決して黙ってはおらず、合いの手を入れたり対抗するかのごとくソロを弾いたり大忙し。しかもオーケストラまでもが5番目のソロ・パートのようにおしゃべりの輪に加わるので賑やかなことこの上ありません。“競い合う”協奏曲としてのおもしろさと、各パートが表情豊かに歌い交わすオペラの重唱のような楽しみが

ぎっしり詰まったこの曲...しかし、大事なものが欠けては魅力半減。そう、どんな瞬間にも相手の呼吸を見計らい、語り合おうとする心、「室内楽的精神」がなければ、この曲の“おしゃべりの楽しみ”は一気に色あせてしまいます。指揮者をおかないアンサンブルを長年育ててきたMCOが、互いに気心知れたメンバー(宮本文昭、ダーグ・イェンセン、安芸晶子、安田謙一郎)をソリストに立て演奏する...「室内楽的精神」を発揮するには、まさに理想的な条件が揃っている、と言えるのではないのでしょうか。MCOがこれまで演奏していなかったことが不思議なくらい、そのキャラクターにぴったりの作品です。

同様のことはモーツァルトのディヴェルティメントK.334にも言えるでしょう。ホルン2本+弦楽合奏で演奏されることが多いこの曲、オリジナルは各パート1人で演奏される、いわば「室内楽」だったと考えられています。なるほど、ヴァイオリン・パートはしばしば合奏で弾くのが困難なほどソロイスティックな動きを見せませし、ホルン2本と弦楽パートとの掛け合いもオーケストラというよりは室内乐的。大編成による演奏だと必要以上に重々しくなってしまうこの曲の、本来の“嬉遊曲(ディヴェルティメント)”としての性格を、MCOのきびきびしたアンサンブルが明らかにしてくれるに違いありません。

さて残る1曲、ヤナーチェクの作品ですが、これは弦楽四重奏曲の合奏用編曲なので、あらためて強調するまでもない真正正銘の「室内楽」です。

ヤナーチェクについては必ずしも「おなじみの作曲家」というわけにはいかないので、ここで紙面を割いてご紹介しましょう。

そのエモーショナルな音楽に出会う ヤナーチェク《クロイツェル・ソナタ》の弦楽合奏版

チェコのモラヴィア地方に生まれ、終生をそこで過ごした作曲家レオシュ・ヤナーチェク(1854-1928)の知名度は、同郷のスメタナやドヴォジャークに比べると今一歩、というところがあるかもしれませんが、しかしMCO顧問・小澤征爾がサイトウ・キネン・フェスティバルやウィーン国立歌劇場の公演曲目として彼のオペラ *イエヌーフ* を取り上げるなど、その音楽への評価はゆるぎないものとなっています。

ヤナーチェクがそれほど知られていない理由、それは音楽の質があまりに個性的なことにあるでしょう。先輩ドヴォジャークやスメタナにもまったく似ていませんし、同時代の作曲家 たえばマーラー、ドビュッシー、プッチーニなどともまるで違う。“ヤナーチェク節”としかいいようのない音楽です。とはいえそれは難解な音楽というわけでは決してなく、むしろ実にヒューマンで情熱的、一度聴いたら病みつきになってしまう人も多いことでしょう(かく言う筆者もその一人...)。それにしてもヤナーチェクの音楽がまったく独特の印象を与える理由は何でしょうか。そのひとつとして、彼のオペラの登場人物たちが、あたかも語るように歌い、またたとえ器楽のための作品でも、楽器たちがま

写真左から；
宮本文昭、ダーグ・イェンセン、
安芸昌子、安田謙一郎



るで人間の言葉を使って話しているような錯覚を与えることを挙げておきましょう。そこには、ヤナーチェク独自の「会話旋律」の理論が生きています。ヤナーチェクは若い頃から市場の売り子だろうが講演会の演説だろうが、ありとあらゆる人間の話し言葉を記譜し(娘の臨終のため息まで記譜している...鬼気迫るものがあります)それを自らの音楽へ生かしていったのでした。彼のファンタジックなすばらしいオペラ 利口な女狐の物語を聴けば、その探求心が「動物の言葉」にまで及んでいることがわかります(なお吉田秀和は『私の好きな曲』(新潮文庫)の中でベートーヴェンやバッハの作品と共にこの曲を取り上げています)。もちろんこれはヤナーチェクの音楽の一側面にすぎず、民俗音楽の語法のユニークな用い方や型破りな楽曲構成などいろいろな要素があるのですが、それらの総体として伝わってくるのは、既存の音楽の型ではとうてい収めることのできない(と彼が考える)人間のエモーションの表明、自然の驚異に満ちた力、ということになるでしょうか。芸

術館にこれまであまり登場してきた作曲家ではありませんが、安永 徹&市野あゆみりサイトで演奏された ヴァイオリン・ソナタ など、興奮に満ちた反応を呼んでいたことが思い出されます。ちなみにMCOも98年の第35回定期演奏会で彼の組曲を取り上げていますが、これはごく初期の作品であり、後年のヤナーチェクの作風とはかなり異なるものです(もちろんそれはそれでユニークな作品ですが)。その意味で、今回のMCO定期はオーケストラによる「真の」ヤナーチェク体験をもたらしてくれるものとなるでしょう。

さて、今回の演奏会で取り上げられるヤナーチェク作品は1920年に書かれた弦楽四重奏曲第1番 トルストイの小説“クロイツェル・ソナタ”に靈感を受けての弦楽合奏版。これはトルストイの『クロイツェル・ソナタ』という小説で不倫の恋に落ち悲劇的な死をとげるヒロインにヤナーチェクが強い衝撃を受け、数日間で一気に書き上げられた作品です。ちょうどこの頃ヤナーチェクは38歳年下の人妻カミーラとの熱烈な恋愛関係にあり、ヒ

ロインとカミーラの姿を激しくダブらせていた様子(ちなみにヤナーチェクはこの他にも抑圧された女性の悲劇をテーマにした作品が多いことを付け加えておきます)。実にドラマティックな、音楽によるラブ・レターなのです。弦楽合奏版はオーストラリア室内管弦楽団の芸術監督である指揮者・ヴィアオリニスト、リチャード・トグネッティによる編曲版。この原稿を書いている最中に同室内管弦楽団によるCDが発売されさっそく入手しましたが、ソロと合奏を対比させ、原曲よりもいっそうドラマティックなスケール感あふれるものとなっています。

さて、MCOメンバー、ヴィオラのモーリン・ガラガーはかつてこの版を演奏したことがあり、MCOが定期演奏会の曲目を選ぶ上で重要な役割を果たしてくれました。vivo編集部では彼女にこの曲を演奏した経緯などについてEメール・インタビューを試みました。以下ご覧ください。

《矢澤》

この編曲版、ガラガーさんはいつどこで弾かれたのですか。

ガラガー:ヤナーチェクの四重奏曲の編曲版は、2001年の4月4日、サー・チャールズ・マッケラス指揮するセント・ルークス管弦楽団の演奏会で弾きました。場所はカーネギーホール。マッケラスはチェコ音楽のたいへんな研究者で、チェコのオーケストラとは長いつきあいがありますからね。彼はオーストラリア室内管弦楽団から入手したパート譜を私たちに渡しました。だいたいにおいて、弦楽四重奏曲の合奏用編曲は、コントラバス・パートをチェロ・パートのどこに付け加えるかにほとんどかかっていますね。そうでなければ、どのフレーズを合奏ではなくソロにあてるか。

ちなみにこの演奏会は、竹澤恭子さんがドヴォルザークのヴァイオリン協奏曲をみごとに弾いたこともあってよく覚えています。その後、私たちは米国在住の日本大使のホームパーティに招かれました。カーネギーホールから遠くないニュ

ーヨークの真ん中で、大きな家でしたよ。おいしいおすしをごちそうになりました。

(おっと、話を戻さねば)編曲版の印象はいかがでしたか。また、ガラガーさんはヤナーチェクの音楽のどこに魅力を感じられますか。

ガラガー:印象、といってもこの版が初めての体験ですから特にはないですね。でもヤナーチェクの音楽はほんとにすばらしい。ユニークな「声」を持っています。ほかの誰にも似てませんね。すばらしい和声言語を持っている。それにこの作品はとてもパーソナルで、描写的な作品です。とことんエモーションです。思い出したのだけれど、そのときセント・ルークスの首席第2ヴァイオリン奏者はFukuhara Mayukiさんという日本人でした。彼はもう本当に、これ以上ないくらい感動していました。特に終わりの部分の第2ヴァイオリン・パートにね。私たちはおいしいおすしを食べている間、ずっとこの曲について議論していましたよ。

*

ヤナーチェクへの熱い思いを語ってくれたガラガーさん。MCO演奏会でもきっとエキサイティングな演奏がくりひろげられることでしょう...そして終演後の熱い議論のお供は、やっぱりおすし?

【参考CD】

ヤナーチェク:弦楽四重奏曲 第1番、ハース:弦楽四重奏曲 第2番、シマノフスキ:弦楽四重奏曲 第2番(以上トグネッティによる弦楽合奏版) リチャード・トグネッティ指揮オーストラリア室内管弦楽団

(英シャンドス CHAN10016輸入盤)

文中で触れたCD。第2時大戦中に収容所で虐殺されたハースの四重奏曲(猿の山からという副題あり)も凄い曲!



モーリン・ガラガー・インタビュー



写真左から；
若杉弘、ナタリー・シュトゥツマン

若杉弘とシュトゥツマンを迎え、シンフォニックにお届けします 11 / 23(土) 24(日)水戸室内管弦楽団第52回定期演奏会

メンバーのみのアンサンブルで室内楽を極めるような第51回定期演奏会から一転、第52回定期演奏会は、1997年以来5年ぶりに若杉弘(指揮)とナタリー・シュトゥツマン(コントラルト)を迎え、シンフォニックな色に染められます。ヴァーグナー「ジークフリート牧歌」、ヴェーゼンドンク「歌曲集(ヘンツェ編曲)」、ベートーヴェン「交響曲第1番」という、重厚なドイツ音楽のプログラムです。

現代最高のリート歌手の1人 ナタリー・シュトゥツマン

ナタリー・シュトゥツマンは、10月に登場したバーバラ・ボニーや来年4月にリサイタルが予定されるアンネ・ソフィー・フォン・オッター等と並んで、世界でもトップクラスに位置するリート歌手といえるでしょう。ショソン、ドビュッシー、プーランクなど母国フランスの歌曲はもちろん、不世出のバス歌手ハンス・ホッターに学んだドイツ・リートも、ドイツ人顔負けの美しい発音と知的な解釈で私たちを魅了してくれます。また、的確な様式感が求められるバロックから斬新な切り口を要する現代音楽まで、幅広いレパートリーを持っていることも特筆されます。

そして、あの独特の声。CDで聴く限りでは、力強く豊かな、胸に響かせた声ばかりが強く印象に残りますが、実際に生で接すると、ホールの残響を巧みに利用した軽やかさ、いつまでもその声に身を浸していたくなるようなやわらかさ、高原の風を思わせる涼やかな透明感など、実に様々な表情、ニュアンスを持った声であることに気づきます。つまり、詩に描かれる無限に広がるイメージと人間の心のあやを、シュトゥツマンは自在に声を操って表現できるのです。

このようなシュトゥツマンですから、音楽界をリードする世界的指揮者たちから引っ張りだこであるのもうなずけます。まず、何といても、我々がマエストロ小澤征爾がシュトゥツマンの実力を高く評価しています。シュトゥツマンは、1997年のJ.S.バッハ「マタイ受難曲」、2000年のマラー「復活」といったサイトウ・キネンでの大プロジェクトに招かれ、公演に美しい花を添えました。また、ピエール・ブレーズ、サイモン・ラトル、マイケル・ティルソン・トーマス、ヴォルフガング・サヴァ

リッシュ等、現代の名匠から絶えずラブコールを受けつつけているほか、ジョン・エリオット・ガーディナー、ウィリアム・クリスティ、マーク・ミンコフスキ等、古楽の指揮者たちからの信頼が厚いのもシュトゥツマンの特徴といえるでしょう。

待望の5年ぶりの共演

1997年6月の第30回定期演奏会(指揮:若杉弘)ではじめて水戸芸術館に登場したシュトゥツマン。ラヴェルのウィットに富んだ歌曲集「博物誌」を歌い、絶賛を博したのは記憶に新しいところです。MCOのメンバーも、その歌唱力と表現力に驚嘆の声を上げていました。

また、前回の共演は、シュトゥツマン自身にも忘れがたい印象と深い感銘を与えたようです。「吉田秀和・小澤征爾 理想の室内オーケストラとは! 水戸室内管弦楽団での実験と成就」(音楽之友社刊・2002年6月発売)のために、2001年8月に行われた取材では、最高の賛辞の言葉をもってMCOを語っています。

「アンサンブル能力の高さが他に類を見ないという点は、誰もが指摘するところでしょう。強い個性を持った楽団員を集めていることを思えば、これは驚嘆に値するものです。アンサンブル能力は『室内楽』に欠かせません。楽団員はそのため必要とあらば個を消し去る術を身につけています」「私にとって楽団(注:MCOのこと)との練習は、リサイタルに向けてピアノ伴奏者や弦楽四重奏団と行なうものと同じです。ストレスを感じさせるような計画もなく、時間に追われることもありません。まるで時が止まってしまったかのように、集中力のある奥の深い仕事ができるのです」

「私がモーリス・ラヴェル作曲の「博物誌」を歌うため楽団との練習に入ったときの思い出があります。楽団員が私に、ジュール・ルナール作の複雑でウィットに富む詩句の1節1節を訳してくれないかということです。ラヴェルのこの曲はこの詩にメロディをつけたものです。つまり、作品をよりきめ細かく捉え、叙事的な部分をもっと深く理解して、ラヴェルが意図したスタイルに近づいていこうとしていたのです。それまで20年間歌を歌ってききましたが、こうしたことは初めてでした」(以上、先述の本より)

初の共演から互いに深い音楽的信頼関係を築いたシュトゥツマンとMCO。5年ぶりの共演がさらに熟した実りをもたらすことは、想像に難くありません。しかも、曲は前回とは違って変わって、ドイツもの、ヴァーグナーの「ヴェーゼンドンク」歌曲集(ヘンツェ編曲版)。MCOにとっては、初のヴァーグナー作品となるだけに、聴きどころ満載のステージになりそうです。

ドイツ音楽に造詣深い若杉弘

第30回定期演奏会で、シュトゥツマンとMCOの幸福な結びつきの立役者となったのが、指揮者・若杉弘です。若杉は、MCOと「ヴェーゼンドンク」を共演することを決めたシュトゥツマンから、その指揮者として強く希望され、今回再登場します。

若杉弘といえば、知性派指揮者としての考え抜かれたプログラミングを思い出す方も多いでしょう。町人貴族とナクソス島のアリアドネを組み合わせ、R.シュトラウスとホーフマンスタールが本来抱いていた構想を垣間見させてくれた第26回定期演奏会(1996年6月)、2群のオーケストラのために書かれた作品(J.C.バッハとマルタン)を前半に、異なる編曲家によるラヴェル作品(ロザンタール編曲「博物誌」とラヴェル自身の編曲の「高雅にして感傷的なワルツ」)を後半に配置した第30回定期演奏会(97年6月)などは、MCO史上最もインパクトのあるプログラムの1つと言えます。また、音楽部門の企画運営委員でもある氏は、的を得た曲目選択と司会により感動的に作曲家の生涯を綴った「メシアンの肖像」(93年6月)、合唱曲とピアノ曲を巧みに交差させた「中田喜直 合唱の午後」(2001年5月)など、演奏会の企画者としても知性派ぶりを発揮しています。

こうした若杉弘のプログラミングに親しまれてきた水戸芸術館のお客様にとっては、今回のドイツ音楽プログラムは、意外なほど王道を進んだものに感じられるかもしれません。しかし、今一度思い出していただきたいのは、若杉弘はほかでもないドイツで実績を築いた指揮者であるということです。

若杉弘は、ケルン放送交響楽団首席指揮者、ライン・ドイツ・オペラ音楽総監督、バイエルン国

第30回定期演奏会より
(97年6月)



立歌劇場指揮者などを歴任していますが、特筆されるべきは、1991年にドレスデン国立歌劇場の音楽監督に迎えられたことです。ドレスデン国立歌劇場は、1667年設立の古い歴史を持つ歌劇場で、ヴェーバー、ヴァーグナー、R.シュトラウス等の大作曲家たちが活躍、さまよえるオランダ人、タンホイザー、サロメ、ばらの騎士等、そうそうたる傑作がここで初演されています。そして、その指揮台には、カール・ベーム、ヨゼフ・カイルベルト、オイゲン・ヨッフム、ヘルベルト・フォン・カラヤン等の巨匠たちが立っているだけに、この歌劇場の音楽監督に就任するということは、ただごとではありません。若杉弘の指揮するドイツ音楽が、本場の専門家や聴衆に支持されたのです。その後、チューリヒ・トーンハレ協会芸術総監督・同管弦楽団首席指揮者を務めるなど、長期間に渡り、ドイツ語圏で充実した活動を展開した若杉は、日本に拠点を移した現在も、バーデンバーデン歌劇場やミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団から招かれ、ドイツとの深い関係を保っています。

ヴァーグナーとベートーヴェンの作品が並ぶ第52回定期演奏会は、そうしたドイツ仕込みの若杉弘の音楽をじっくりと堪能できるプログラムです。近年、小澤征爾とのベートーヴェン 交響曲第2番 や、指揮者なしでのブラームス 弦楽五重奏曲第2番 (弦楽合奏版)で、生命力豊かな演奏を聴かせたMCOが、ドイツ音楽ならではの構成感をくっきりと浮き立たせる若杉弘の棒にどう反応するかも、聴き逃せないポイントとなることでしょう。

《関根》

19世紀後半から20世紀初頭の芸術世界に多大な影響を及ぼした楽劇を作り出したことをはじめ、政治運動に参加して逮捕状を出されたり、バイエルンの国王ルートヴィヒ2世と親しくなって膨大な額の援助金を獲得したりと、その才能から人生まで、一般人とはかけ離れた巨大さを持っていた作曲家リヒャルト・ヴァーグナー(1813~83)。彼の女性関係もまた、平穏なものではありませんでした。第52回定期演奏会で演奏される ヴェーゼンドンク歌曲集 と ジークフリート牧歌 は、ともにヴァーグナーが愛した女性と深いかわりをもっています。

1849年、ドレスデン革命に参加した疑いで逮捕状を出されたヴァーグナーはチューリヒに亡命しますが、そこで芸術を愛する富豪オットー・ヴェーゼンドンクと知り合います。多額の援助を得、またヴェーゼンドンク家の隣に快適な住居まで提供されたヴァーグナーは、しかし、オットーの妻マティルデと道ならぬ恋に落ちてしまいます。そのマティルデの詩によって書かれた ヴェーゼンドンク歌曲集 は、2人の悩める愛が深く刻印された作品です。その2人の関係ですが、長くは続きませんでした。当時ヴァーグナーの妻であったミンナが夫の不倫に気づき、

マティルデの夫オットーの耳にも入ってしまったためです。

ヴァーグナーは、マティルデとの関係が断たれた後、ヴァーグナーの理解者で指揮者のハンス・フォン・ビューロの妻、そしてフランツ・リストの娘でもあるコージマと接近します。ヴァーグナーの最初の妻ミンナが死に、コージマがビューロのもとを去った後、1870年、ヴァーグナーはコージマと結婚します(ヴァーグナーは65歳、コージマは33歳でした)。この年の12月25日、すなわちコージマの誕生日に、妻への贈り物として作られた曲が ジークフリート牧歌 です。曲名には、前年にコージマとの間に誕生した長男の名前が付けられています。

トリスタンとイゾルデ を髣髴とさせる半音階進行と和声により、悩ましくも官能的なマティルデとの愛が反映された ヴェーゼンドンク歌曲集 と、素朴で平明な楽想から家庭人としてのヴァーグナーのやさしさと微笑みが聴き取れる ジークフリート牧歌 。第52回定期演奏会で演奏される2曲は、ともにヴァーグナーが愛した女性と関わりつつ、なんと対照的な性格を持っているのです。

《関根》

ヴァーグナーの女性関係から 生まれた2つの作品

ヴェーゼンドンク歌曲集 と ジークフリート牧歌

最近の公演から

JULY
AUGUST
SEPTEMBER



1



2



3



4



5



6

プロムナード・コンサート
ヴァリエーションズ-2 (7月27日)
プロムナード・コンサート
夏休みスペシャル企画 (8月10日)

エントランスホールの入場無料の公演としてお楽しみいただいているプロムナード・コンサート。今年の夏は、普段のオルガンの演奏会に加え、2つの特別企画を開催した。

最初は、茨城県内の演奏家が出演して、パイプオルガン以外の演奏を聴いていただくシリーズ「ヴァリエーションズ」の第2回公演。出演は、フルート・デュオのル・メユール(フルート:不二原輝子、今久枝ノブ子/ピアノ:加納麻衣子)。演奏曲は、「ドプラー:アンダンテとロンド 作品25」やディズニー映画『南部の唄』で用いられた「ジッパ・デュー・ダダー」など、楽しく華やかな作品が並べられた。印象的であったのは、唱歌「浜辺の歌」や「夏の思い出」など、夏をテーマにした数々の愛唱歌をメドレーに中山育美が編曲した「四季のぼぶり」の“夏”の演奏。2本のフルートとピアノが、エントランスホールに初夏の彩りを運んだ。

そして、夏休みスペシャルとして開催したのが、現代美術センターの『カフェ・イン・水戸』展の関連企画、獅子倉シンジ[水戸バケツ キッズ]パフォーマンス。一般公募の市内の小学生20人が、色とりどりのポリバケツをかぶって、芸術館の広場を行進し、エントランスホールでは、バケツ巨人「バコーン」をやっつけるというパフォーマンス。このパフォーマンスに合わせて山口綾規が、ELPのアルバム『Tarkus』収録曲をパイプオルガンで演奏した。普段のプロムナードでは余り聴くことのないポップなサウンドが、バケツで埋め尽くされた会場に響いた。ちなみに、オルガニストの山口さんまでコーンを頭にすっぽりかぶった演奏であった。コーンをかぶったオルガニストの演奏なんて、もう一生目にすることはないだろう!!《中村》

矢部昌子ピアノ・リサイタル(9月8日)

県内在住の演奏家による企画シリーズの今年度4本目として、水戸市在住のピアニスト矢部昌子さんが登場した。プログラムは、矢部さんのバリ留学経験を生かし、メインにドビュッシーの映像「第1集・第2集」を据え、その前に、ピアノの響きの作り方という点でなだらかにドビュッシーにつながると矢部さんが考えるモーツァルト「ファンタジア 二短調」、リスト「エステ荘の噴水」、オーベルマンの「谷」、ショパン「バラード第4番」が置かれるというもの。特に、水のさまざまな諸

相を描いた「エステ荘の噴水」と水の反映(映像「第1集」の1曲目)の比較は、興味深く聴けたのではないだろうか。

本番に向けてのリハーサルは至極マイペースに行われた。8月から毎週1回、同じ時間帯で、同じようなメニューで進んでいく。しかし、そこには地味ながらも着実な前進があり、積み重ねの大切さと矢部さんの音楽の芯の強さに感銘を受けた。

本番は、そのリハーサルの成果が実り、矢部さんの本領を見事に発揮したものとなった。特にドビュッシーにおけるニュアンスに富んだ美しい音色が印象に残る。アンコール曲は、ドビュッシー「花火」。《関根》

アンケートから「テクニックに感服、大いに賞賛したい。」(水戸市:T.K.さん)「ドビュッシーの曲は古い言い方もかもしれないが、水を得た魚の如くに、鍵盤上を指は走っていた。」(石岡市:N.I.さん)「彼女が中学生の時、茨城県で26年ぶりに学生コンクールに入賞して以来、芸大附属高校、芸大、そしてフランス留学と、着実に研鑽を積まれた成果を十分感じ取れるリサイタルであった。」(A.S.さん)

畑中良輔の「日本のうた」セミナー第2期

第1回「山田耕筰Ⅲ」(9月14日)

昨年、好評で迎えられた「畑中良輔の日本のうた」セミナーの第2期がスタートしました。今回はテーマを山田耕筰の歌曲集「風に寄せてうたへる春のうた」全4曲にし、前半2曲を幅野由美さんと西田ちづ子さん、後半2曲を石橋友子さんと辻弘美さんに分かれて研究、畑中講師の指導を受けました。聴講された方にとっては、同じ曲を2人の受講生のレッスンで聴き比べることが出来、より多面的にこの山田の傑作に迫れたのではないのでしょうか。講師は、実力者揃いの受講生の歌に感心しながらも、歌の基礎となる発声の大切さを強調し、「深い呼吸で歌うと、聴いている人の心を自然と引き寄せられるのです」と全員にアドバイスしました。

また、いつもながら会場の皆様の熱意が凄い! 自前のノートや楽譜を持ってメモを取る人、詩を朗読するときしっかりと歌詩を目線まで持ち上げ、姿勢を正して朗々と声を出す人たちの姿が印象的でした。講師の畑中もそんな会場内の熱気に乗ったのか、予定していた休憩を返上し、2時間以上通してレッスンを続けました。勢いは止まらず、そのまま受講生のミニ・コンサートもスタート。風に・・・と、山田の童謡作品が演唱されました。



1



2



3



4



5



6



7

休憩を挿んで、セミナーの最後を飾るゲストのステージには、山田歌曲のスペシャリスト・関定子さんが登場し、雨情民謡集を披露しました。会場の拍手に応えたアンコールは、同じく山田の風鈴（川路柳虹 詩）と深川（江戸小唄）。関さんは風鈴でしっとりとした叙情を聴かせると、深川では一転、芸者顔負けの舞を披露しつつ、小粋な調子をつけて歌い、会場を楽しませてくれました。歌い終わると、講師は関さんとピアノの田中直子さんを「定奴（さだやっこ）と直奴（なおやっこ）でした」と紹介。会場はいつそう湧いて、第2期最初のセミナーが締めくくられました。《松田》

お話しピアノ ピーターとおおかみ

（9月28日）

小さな子供たちにも楽しんでもらおうと、作曲家であり当館音楽部門の企画運営委員でもある間宮芳生が企画したのが、ピーターとおおかみ公演。出演は、間宮に加え、高橋アキ（ピアノ）と和泉流狂言師の野村万禄（語り）。サティの子供の音楽集では、野村と高橋は、サティのウィットに富んだ世界を軽妙に表現した。そして、メインプログラムがプロコフィエフのピーターとおおかみ。勇敢な男の子ピーターが、狼に呑みこまれてしまったあひるを救出するために大活躍するという話。野村の鍛え上げられた「語りの芸」が発揮された臨場感溢れるステージとなった。この曲のオリジナルはオーケストラ作品だが、今回はピアノ編曲版による演奏だった。後半の行進の場面などは、あらゆる登場人物たちのテーマが混在する複雑なテクスチャをもつ音楽でもあるのだが、高橋はこれをピアノ1台で見事に弾き分けた。さらに、森下泰による照明が、ときに牧場の情景を、ときにおそろしげな狼の様子などを表現し、イメージーション溢れる空間を作り上げた。後半は、間宮芳生の2作品。

家が生きていたころは、エスキモー族の口承詩をテキストにした、今回の演奏会のために書き下ろされた作品。神秘的な雰囲気照明、ロマンティックな音楽が奏されるなか、雪が燃えたり、家が空を飛んだりするという不思議な話が語られた。最後は、高橋と間宮の連弾で地球のともだち。日本、韓国、ウガンダなどさまざまな地域で歌われる子供の歌の旋律などをベースにして作られた、素朴で楽しい音楽が演奏された。会場の子供たちは、本当に最後まで、めくりめくりお話しピアノの世界を、どきどきしたり、うっとりしたりしながら聴き入っていた。《中村》アンケートから後半のライトの組み合わせが、

ますます舞台をひきたててステキでした。ストーリーも楽しめました。（水戸市：N.K.さん）ストーリー付の音楽ということで、一緒に来た子供達も楽しく聴けました。曲に、語り・照明がつくと光景や人物が手にとる様にわかっておもしろかったです。（常陸太田市：M.S.さん）こわいところでは、おおきな音でこわかったけれど、ことりはかわいい音でした。（水戸市：N.N.さん〔7歳〕）色々なピーターとおおかみをCD等で聴いていますが、野村さんの語りは今までと違い、本当にその情景が良く浮かんできました。また、ピアノだけのこの曲の演奏を聴くのも初めてで、オーケストラとはまた違ったおもしろみがありました。（鹿嶋市：C.M.さん）

茨城の名手・名歌手たち 第13回（9月29日）

今年4月28日に行われた出演者オーディションにより選出された8名の名手たちが5ヶ月の期間を経て演奏会に臨んだ。（ピアノ6名、ヴァイオリン1名、箏1名）

司会の間宮芳生も語るとおり、オーディションから本番までの期間に、さらに飛躍的な上達を遂げる名手たちが出てくるのが、この企画の聴きどころでもある。今回特にそれを感じさせたのはヴァイオリンの岡部磨知さん。オーディションのときと同じプロコフィエフのヴァイオリン・ソナタ第2番を弾いたが、音自体、格段に伸びと艶を増しており、表現も一層遅くなっていた。

ピアノは、バロック、ドイツ・ロマン派、近現代とヴァラエティに富んだプログラムが並んだ。アイヴズのピアノ・ソナタ第2番を弾いた篠原有紀子さんは、パンをこねる棒にフェルトを巻いたものを持って登場。作曲家の指示に従って、それでピアノの鍵盤を押し、トーンクラスター独特の音色を響かせた。また、箏の安田有希さんは、西洋の楽器とは一味も二味も違う邦楽器の響きの繊細さを聴かせてくれた。

なお、今年から部門ごとに隔年の開催となったため、来年の対象部門は、管楽器・打楽器・声楽・器楽アンサンブルとなる。《関根》アンケートから衣装もそれぞれに美しく、演奏も見事です。今後が楽しみです。才能を持った方々に拍手です！（水戸市：T.G.さん）毎回楽しみにしています。ピアノで知らなかった作曲者を発見できました。それも細長い棒みたいなのを鍵盤にのせて弾くなんて、こんな奏法があったのかと驚きました。（高萩市：A.T.さん）女性の活躍が素晴らしかったです。ピアノ以外がもっと多ければ...（真壁郡：S.A.さん）



* nettama=ネットワークする猫、タマ。
芸術館のコンサートをサカナに
いろんなところへnettamaします。

近代フランス・オルガン音楽を聴こう！(後編)
「オルガン交響曲」というジャンルがある。サン・サーンスのオルガン付き交響曲のことでなく、オルガン独奏のための交響曲だ。前回紹介したカヴァイエ・コルの華麗な効果を持ったロマンティック・オルガンの登場とともに、現れるべくして現れたジャンルだといえるだろう。創始者はシャルル・マリ・ヴイドール(1844 - 1937)。一台でオーケストラに匹敵する響きを創り出すオルガンならば、単独で(本来オーケストラのための曲種である)交響曲」を表現できるはずだ。こんなふうに、ヴイドールは考えたのだろう。彼はその生涯に、10曲のオルガン交響曲を書いている。ロマンティック・オルガンの能力をフルに発揮したこれらの作品。大半の作品は、サン・シュルピス教会にあるカヴァイエ・コルの5段鍵盤(!)オルガンのために書かれたという。は、どれも4 - 7楽章からなり30分以上かかる大曲で、えらく聴きごたえがある。なんと全曲盤があり(ピエール・パンシュマイク独奏、仏ソルスティスSOCD 181 - 5、輸入盤5枚組)これはヴイドールゆかりのカヴァイエ・コルのオルガン10種を使い分けたというすごい企画だ。前述サン・シュルピス教会の大オルガンも聴ける。そんな大物を買うのは心理的にも懐的にもちょっときつい、という方は抜粋で一番有名な第5番の終楽章“トッカータ”はいかが。轟く低音で示される神の声の上で色とりどりの天使たちが舞い踊るといった趣の絢爛たる楽章だ。マリー・クレール・アランのCDがある(エラート WPCS11399)。一方前回紹介したヴィエルヌも6曲の交響曲を書きおり、そのうち4曲はやはりアランの演奏で聴ける(エラート WPCS11400 ~ 401)。

踊りといえばそのアランの兄、ジュアン・アラン(1911 - 40)の音楽だろう。彼のオルガン曲を聴いていると、あの巨大なオルガンが宙に舞いあがって旋回しているかのような錯覚に陥

る。この世に存在しない絵の具で描かれた絵画のような不思議な色彩感、調性とも旋法とも定め難い宙づりの和声、そして生きもののように伸び縮みするリズム...20代で戦死したこの若き天才の音楽は、間違いなく音楽史上唯一無二の個性に輝くものだ。マリー・クレール・アランの芸術館リサイタルの曲目 連弾 ファンタジー 第1番、第2番に圧倒されたあなたなら、Bさんおすすめの3つの舞曲を聴いて損はない。飛翔する生命のダンスが戦死する運命を予期したかのような悲劇的な行進曲によってかわられてゆくあたり胸を突かれる。ほかにも、空中庭園とか、魔術幻影とか、アランの曲は「音楽とは魅惑ではなく、神秘であろう」という彼自身の言葉そのもの。

神秘、というならばアラン以上の強烈な神秘主義者、シャルル・トゥルヌミール(1870 - 1939)も気になる。彼の最高傑作といわれるその名も神秘的オルガン は51の聖務日課からなり全曲の長さはバッハの全オルガン作品に匹敵するウルトラ級の大作だそうだが、僕は残念ながらまだ聴いたことがない。ヴイドールの弟子でアランの師匠でもあるマルセル・デュブレ(1886 - 1971)の受難交響曲や十字架の道も聴いてみたいけど、ここでは生涯に書いた曲の作品番号が11までしか達しなかった寡黙な使徒、モリス・デュリュフレ(1902 - 1986)にふれたい。フォーレ以降もっとも美しいと言われる、レクイエムで有名なデュリュフレだが、オルガン曲にも傑作がそろっている(ちなみに彼はトゥルヌミールの弟子)。前回ふれた、ジュアン・アランの霊に捧げるアランの名による前奏曲とフーガは感動的な作品だが、Bさん一番のおすすめは組曲 作品5。霧の中から姿をあらわすゴシック教会のごとき偉容に圧倒される“前奏曲”、教会の暗闇の中にほのめく蠟燭の灯りを思わせる“シシリエンヌ”、燃える炎が螺旋状の上昇気

流に乗って果てしない高みへと昇りつめてゆく“トッカータ”...たしかに、まぎれもなくデュリュフレのオルガン曲における最高到達点だろう。なーんて偉そうなことを書けるのは彼の全オルガン曲がたった1枚のCDに収まっているからだ(シュテファン・シュミット独奏、独アイオロスAE10211、輸入盤)。でも他の曲もみんなすばらしいです。

さて、20世紀音楽史上最大の巨魁というべきオリヴィエ・メシアン(1908 - 92)にふれるスペースはもうほとんどないが、今回勉強してなんとなくわかったことがある。ちょっと近寄り難い雰囲気のある黙示録的幻視者にして強固な理論派のメシアンだが、そのオルガン曲は、ちゃんと近代フランス・オルガン音楽の歴史の延長線上にあるということだ。嘘だと思ったら...Bさん、何を聴くのがいい? なに、主の降誕? おいおい、全曲1時間もかかるって! でも確かに、プロムナード・コンサートでもときどき抜粋されて弾かれているな。この機会にCDで通して一気に聴いてみようか(ハンス・オラ・エリクソン独奏、瑞BIS BISCD410、輸入盤)。最終曲“神はわれらと共に”の、目くらむ光の洪水に飲みこまれながら、前後編にわたる近代フランス・オルガン音楽の旅を終えることにしよう。あしたあなたが行く芸術館のプロムナード・コンサートでこれらの曲に会えるかもしれませんよ...



デュリュフレ:オルガン曲全集

パンフにご注目! 今年の4月から演奏会パンフレットのデザインを予告なしに替えてみたところ、「とても整理しやすくなりました!」あの色はどんな意味があるのですか?と

速達

Petite 情報

といった喜びの声、お問い合わせが続々来てもらうたいへん!...ということは全然ないので(泣)ここでご紹介しましょう。これまで演奏会ごとに独自のデザインを施してきましたが、4月以降は基本的に共通デザインになっています。「茨城の名手・名歌手たち第13回」のプログラムを例に挙げてみましたが、基本的にはすっきりした白をベースに、演奏会名を書いた色枠がはめこまれています。この色、意

味がありまして、専属楽団は赤、招聘演奏家企画(ボニーヤアランのリサイタルなどですね)は青、芸術館独自企画(企画委員の企画や「名手・名歌手たち」など)は黄色、茨城県在住演奏家の企画は緑、となっています。さらに背表紙にまたがるように演奏会実施年が記されています。MCOやセミナーものなど例外のデザインもありますが、これであなたの芸術館資料棚は見易さアップ!



information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029 - 231 - 8000
営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029 - 227 - 8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

【アートタワー通信】第1・第3週に1度、新しいばらき新聞に登場。

水戸室内管弦楽団福岡公演のお知らせ

3年ぶりとなるMCO福岡公演。前回はトレヴァー・ピノックの指揮でしたが、今回は若杉弘&ナタリー・シュトゥッツマンとともに演奏します。福岡および九州の皆様、ぜひ足をお運びください。

【日時】2002年11月25日(月)19:00開演 【会場】福岡シンフォニーホール 【出演・曲目】第52回定期演奏会と同じ 【問い合わせ】財団法人アクロス福岡 TEL:092-725-9112

LD鑑賞会のお知らせ

目下、人気急上昇中! 音楽部門学芸員・関根哲也の解説とゴージャスな再生環境で楽しむ水戸芸術館友の会企画・LD鑑賞会の第11回目はロッキー・セヴィーリヤの理髪師。アップロード指揮、ポネル演出の名舞台によって盛り沢山のプファの楽しみと歌の饗宴に酔いしれてください。11月30日(日) 時開演、会場は水戸芸術館会議場、友の会会員限定企画ですのでお問い合わせは水戸芸術館友の会(029-227-8111)までどうぞ!

芸術館スタッフのNHK-FM登場日が変わりました。

NHK-FM水戸放送局で月 金曜日18:00から放送されている「FM水戸アップデート」、これまで芸術館スタッフが登場するコーナーは金曜日の「金曜招待席」でしたが、現在木曜日の「文化観光情報」のコーナーに移動しています。時間はほしい18:15-20分頃から約15分ほど。周波数は水戸周辺が83.2MHz、日立周辺が84.2MHz。不定期登場ですので、週末にイベントがある週あたりをねらってみてください。

チケット・インフォメーション 11月3日(日)発売分

ニュー・イヤー・コンサート 2003

1/5(日)17:00開演 料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥3,000
ニュー・イヤー・コンサート 2003には、10月31日(木)より友の会の先行電話予約があります。

これからの演奏会・残席情報

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右・裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

水戸室内管弦楽団第51回定期演奏会	
11/9(土)	...中央、左右・裏
11/10(日)	...中央、左右・裏
水戸室内管弦楽団第52回定期演奏会	
11/23(土)	...中央、左右・裏
11/24(日)	...中央、左右・裏
畑中良輔の日本のうた セミナー 第2期	
12/7(土)...	自由席 2003年3/15(土)...
クリスマス・プレゼント・コンサート 2002	
12/23(月)	...中央x、左右・裏

10/10(木)現在の状況です。
公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。
固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館11月のスケジュール

コンサートホールATM

第12回 能 IN MITO 特別公演『胡蝶』
11/2(土)18:30開演 料金(全席指定):A席¥5,000 B席¥3,000
水戸室内管弦楽団第51回定期演奏会
11/9(土)18:30開演、11/10(日)14:00開演
料金(全席指定):S席¥6,000 A席¥5,000 B席¥3,500
新荘公民館20周年記念 音楽の祭典 新荘地区オータムコンサート
11/17(日)13:00開演 入場無料
水戸室内管弦楽団第52回定期演奏会
11/23(土)18:30開演、11/24(日)14:00開演
料金(全席指定):S席¥10,000 A席¥8,000 B席¥6,000

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート
11/2(土)13:30/15:00 11/16(土)13:30/15:00
11/17(日)12:00/13:00 11/30(土)13:30/15:00
入場無料 演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

ACMダンス公演「duo / trio」
11/16(土)19:00開演、11/17(日)16:00開演
料金(全席指定):一般¥3,000 団体(10名以上)¥2,700 学生¥1,500
萬狂言水戸公演『萩大名』『宗論』
11/30(土)19:00開演 料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥2,000

現代美術センター

12人の挑戦 大観から日比野まで
10/5(土)~12/8(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)
休館日:月曜日ただし11/4(月)は開館、11/5(火)は休館
入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600 中学生以下、65歳以上、各種障害者手帳をお持ちの方は無料

茨城の主な11月の演奏会

常陽藝文センター TEL / 029(231)6611 馬場みどり ピアノ リサイタル 11/17(日)15:30開演 (問)馬場 TEL / 0471(33)6639

茨城県民文化センター TEL / 029(241)1166 茨城交響楽団 第85回定期演奏会 11/17(日)14:00開演 (問)茨城交響楽団事務局 TEL / 029(233)1448

水戸市民会館 TEL / 029(224)7521 コンセール・ムジカ 第24回演奏会~日中音楽交流~ 11/2(土)18:30開演 (問)コンセール・ムジカ事務局 TEL / 029(257)3888

日立シビックセンター TEL / 0294(24)7711 バリアフリーコンサート 梯 剛之 ピアノ・リサイタル 11/8(金)18:30開演 げんでんふれあいコンサート2002 ロンドンBBCポップス・スペシャル・コンサート 11/29(金)18:30開演

大宮町文化センター・ロゼホール TEL / 0295(53)7200 茅根順子リサイタルIII 11/24(日)18:30開演

常陸太田市市民交流センター・バルティホール TEL / 0294(73)1234 岸田今日子&荘村清志「音楽と物語の世界」 11/30(土)18:00開演

東海文化センター TEL / 029(282)8511 2002東京室内管弦楽団リクエストコンサート 11/13(水)19:00開演

ギター文化館 TEL / 0299(46)2457 マリア・エステル・グスマン ギターリサイタル 11/3(日)15:00開演 ヘンドルの知られざる室内楽 11/24(日)15:00開演

ノバホール TEL / 0298(52)5881 ゲヴァントハウス弦楽四重奏団演奏会 11/16(土)15:00開演 エーテポリ交響楽団 11/21(木)19:00開演 つくばフィルハーモニー合唱団 第29回演奏会 11/24(日)14:00開演 大萩康司 ギターリサイタル 11/29(金)19:00開演

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] 2002年11月発行 第86号
編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8
TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130
e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]
編集 / 水戸芸術館音楽部門(五十音順):関根哲也 中崎美智代 中村 晃 馬場千恵
松田善幸 矢澤孝樹(編集長)
DTP / office west
印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は... もう年末! もうクリスマス!